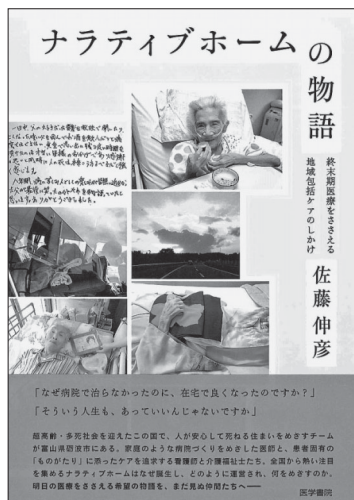


この本、
いかがですか？

佐藤伸彦 著
定価 1800 円 + 税
A 5 判 / 医学書院 / 2015 年

評者 桑原紀子 助産師、介護のプロ道場代表

人生最期の「さようなら」に
寄り添うために

看護職として人とのかかわりをもつ時、私たちは対象者について、どのように考え、感じ、行動をとっているのでしょうか。病名や症状だけでなく、家族構成や関係、どのような生活を送ってきたのか、大切にしていることは何か、どんな役割があるかなど、対象者の全体像を捉えることに努めながら、対話を続け、ケアに活かしていきます。そして、何気ない対話から、さまざまな生活史が語られることや、その語りによって、対象者自身や関係性の変化をしばしば体験します。

特に終末期には、生活場面として非日常である病院で、その人らしく人生を終えるための支援として、語りや対話を欠かすことはできません。しかし、多大な業務を担うなかで思うようにその時間がとれないジレンマに陥ったり、看送りの後、これでよかったのかと、自責の念にかられること

もあります。

現在のわが国では、半数以上の方が自宅で最期を迎えたいと願っていますが、実際にはいまだ8割近い方が、病院で人生の最期を迎えています。在宅で終末期を迎えようとしたら、家族の力や、在宅医療と看護、介護の連携が必要です。また、高齢者施設でも終末期を支える体制を整える必要があります。その人らしく人生を終える支援をするためには、何をしたらよいのでしょうか。

2014 年 7 月、本書の著者である佐藤伸彦医師の講演で、ナラティブホームでの「物語」を実際に拝聴する機会がありました。まもなく人生の最期を迎える本人や家族の物語、寄り添う医師や看護・介護職の物語は、それまでの対象者との関係や、また私自身の母親の看送りとも重なり、感情を揺さぶられたことを記憶しています。

本書には、その「普通の高齢者が歳をとり、病気や障害をもって生きていき、普通に終末期を迎えた」物語が精緻に、生き生きと紹介されていました。そして、終末期を支える医師や看護師、介護士、さらに関連するさまざまな業種の取り組みの物語であると同時に、ナラティブホーム設立までの物語、ナラティブホームの運営や実践の物語など、多角的な読み方のできる構成になっています。人生の最終章を支えるための、さらに一步を踏み出すヒントがたくさん盛り込まれています。

私は母の看取りをきっかけに、介護者・介護職を支援する活動をしています。女性と子どもおよび家族の生命にかかわり健康と生活を支える、助産師としての活動の一環と考えています。

超高齢社会は多死社会でもあります。すべての年代のケアにかかわる助産師のみなさまと語りたい 1 冊です。

①